

IBL (Inquiry Based Learning) 研修での学びから

呉大学看護学部

中 柳 美恵子

■ はじめに

近年の大学教育の変革に求められる課題の一つに、教授中心・講義中心の授業の反省から、学習者中心の教授法の開発や実施があげられている。

本学建学精神の「究理実践」は「理論と実践を結び合わせ、これを一体のものとする努力の中に真の人間形成があり、科学的進歩がある。」¹⁾とされている。この理念は、実践科学としての看護学が、理論と実践を結び合わせ一人の看護者としての人間形成をし、一人一人が行なう看護実践そのもののの中に普遍的な応用科学としての進歩が期待されていることの根幹と重なっている、といえよう。「理論と実践の融合は、M. ブーバー (1878～1965) の「対話」の思想の授けを受ければ、この融合が比較的容易となり、大きなエネルギーに転化することが可能になる」²⁾との示唆を含め、本学の教育理念になっている。

看護援助は、患者や時にはその家族を含めて様々な臨床スタッフとの関わり中で行なわれる。ケアにおいては、個別にその患者個人に応じてその人の状況をより安楽に、そして安全で、できるだけ良い方向への変容が出来るように働きかける。ナイチンゲールは看護は art であり science であるといっているが、science の部分の看護診断分類等は学問的に構築されてきている。これからはまさに看護援助として、患者個人に働きかける看護介入のありかたが、創造していく看護のアートの部分として重要である。看護実践教育の場では、多様な学生が、患者の個性に応じた看護援助ができるようになるための課題は大きい。実践の中から普遍的看護の真理を学問的に探求していく姿

勢を育てられるよう、学生の問題解決能力を啓発していく教育過程が重要になってきている。

平成11年4月にスタートした本学看護学部は、様々な教育経験・社会体験をもった教員が、21世紀を担う看護実践者となる学生に、どのような授業展開をしていけばよいかを模索しているところである。折しも、近隣に IBL (Inquiry Based Learning: 探求に基づく学習) について研究している広島大学大学院教育学部助教授 Virgilio U. Manzano 氏との出会いがあって、2000年2月18日に、学内での研修会を実施することになった。その学びからチューター学習会を振り返り、今後の課題を考えてみたい。

■ IBL の歴史とチュートリアル教育

チュートリアルは、チューター (個別指導教員) による少人数教育の総称である。その具体的な形態は、家庭教師、学生生活の個別指導、セミナー、PBL (problem based learning) チュートリアルなど実に多様である。IBL による教授法もチュートリアル教育の一つであるが、「IBL は教育方法論ではなく、むしろ哲学だといわれる。それはハワイ大学の教員が学生に学んでほしいということをも明らかにした結果、生み出された教育哲学である。学生に知識を詰め込むのではなく、大人の学習者として自己学習をして欲しいし、できると考えての発想からで、ハワイ大学全体では IBL は10年前から使われはじめ、看護学部では5年位前から使われている」³⁾という。そして「学生の探究心や自己学習能力をはじめ、批評的思考能力を向上させ、学生同士でお互いに成長していくこと

なかやなぎ みえこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

をねらいとして、学生の学習姿勢を形成するため、できるだけ入学後早い時期から IBL を取り入れた教育を行なうことが望ましい⁴⁾と考えられている。

チュートリアルという教育方法は、実際に看護職だけに限らず対人ケアのいろいろな専門職の教育の場で使われ、専門職者の間で共働する力を育てるといわれている。看護学生は、医療関連の様々な職種間のチームの一員として、患者に対してケアすることを学ぶ必要がある。そのため社会的な経験や立場をもつ患者の能力を認めながら、「私だけ」という感覚だけではなく、医療職種間で仲間と共に働くという看護者の育成が大切である。IBL での学習活動を通して、学生は各々の専門職者がどのようにケアに貢献するかということを学び、社会資源や制度の活用の仕方をも学び、お互いの専門についても学ぶことができ、協力することを学ぶ。どのようにお互いから学びあうか、どのようにお互いに教え合うか、どのように専門職が協力しあえるか、どのように他の専門職に依頼するか、などを学習することができる。「1人の専門家が患者のケアすべてについての情報をもっているのではなく、専門職がグループとしてその情報をもつことになる現場では役に立つ⁵⁾と期待されている。

三重県立看護大学⁶⁾を例にとると、学部全体で取り入れているので、IBL は、基礎看護学は基礎看護学で、成人看護学は成人看護学で、地域看護学は地域看護学でというように領域で行っている。従って学生は常時2～3科目でIBLを行うことになる。基本的には教員の作成した事例を基に学生が個々の学習課題を明確にして、次回に調べて発表してまとめるという形をとる。IBL では、思考力を養うとともに単元での目標としている知識の修得も重要で、かつ対人関係能力も育てるという。90分のクラスを2つ続け、翌週も90分のクラスを2回行う。初回は、グループに分かれて(学生8～10名、チューター1名)役割を決め、パート1とパート2の内容を90分で行い、次の90分でパート3とパート4の内容を段階的に進め、調べる項目の分担を決めて終了する。翌週は、役割を決め、調べた項目の発表を行い、グループ全体の学習過程の振り返りとチューターからの事例のまとめ、それらの評価をして終了となる。チューターはチューターガイドを作成する。このガイドには次の内容が含まれる。できるだけ魅力的なトピック、学習目的、人と文献の資源、単元の目標

(3～5項目、学習内容を示す)、その事例を討論するのに重要な考え方、知識、技術、キーワード、事例の概要、事例のまとめ等である。そしてパート1からパート4の情報とそれぞれの Guiding Questions を作成する。このチューターガイド作成のために、単元の目標を満たすに十分な事例を特定する。その場合は実際に教員が看護を行った実在のケースをとる。担当教員で話し合い、必要な内容が含まれているか、余分な内容はないかを洗練するという準備をしている。

■ チューター学習・交流会への展開を試みて

今年度4月から本学では、チューター制を取り入れた。2年次生からは希望により、1年次生は人数調整をして1人あたりのチューターが約10～12人の学生の指導を担当することになり、入学後早期にできるだけ早く大学生活へなじめるよう個別相談や、1・2年生のチューター学習会等を行なってきた。

著者は1・2年のチューター学習会として、入学後早期に呉市内にある青空山へのハイキングを行なった。4月から5月にかけては「高橋君のこの頃の生活⁷⁾」と題したトピックを参考に、学生とともに学習する課題としてとりあげてみた。19歳の男子学生の生活について、身体面、精神面、社会面から考えさせ、栄養・食事・睡眠などについて日常生活との関連から課題を見つけ、学習して発表し、相互に学習していくことができるよう取り組んだ。結果としては十分な話し合いにより課題をしっかりとつかみ、主体的に学習を深めて探求しながら、発表にもっていくまでの準備が、学生の中で十分できなかった感がある。しかし、親元を離れ一人で生活の主体者として問題意識をもって日々自らの生活をどのようにしていかなければならないかという課題については、相互に検討し合うことができ有意義であったと思う。5月半ばには広島市内の平和公園に出掛け、記念資料館で平和学習を行い、6月にはスポーツ、7月には全員が参加してピザを作って会食をし、楽しい対話と体験学習の交流を行なった。また前期最後の9月29・30日には、1・2年チューター学習・交流会として、1泊2日の宿泊研修を行った。広島港から15分の瀬戸内海に浮かぶ似の島で、できるだけ自然環境を活かした交流の時間を多くもつようにし、学生の希望から平和学習も取り入れた。対

話による学生間の相互理解と、看護者としての仲間と共に育ちあう環境づくりを考えての試みであった。将来の看護者として考えさせられる多くの課題を提示しているビデオを準備して、「ロレンツのオイル」という映画を全員で鑑賞した。この映画はアメリカの実際あった実話をもとに作られている。難病になった子供を中心に、両親が研究の末、治療薬を開発し病気を食い止めていくさまざまなプロセスが出てくる。家族愛、患者会、学生の講義への患者の参加、家族看護のあり方、看護介入としての音楽を取り入れた在宅看護、研究の取り組みなど、医療・看護職に関わるものが直面する課題が多く投げかけられていた。学生から本当にいい映画をみることができた、という感想がでた。この1泊2日のチューター学習交流会は、17名(チューター学習会メンバー12名とチューターとしての関わりの学生5名)全員が参加し、それぞれの学生に、共有財産としての2000年前期の思い出ができたようだった。

この他、2年生はできるだけ隔週『愛をこめて生きる—今との出逢いを大切に—』(渡辺和子著、PHP文庫)を読んだ。またその週に出会った体験や、自分の読んだものなどの所感を話し合い、「出会いによる精神療法」⁸⁾ 的役割を果たす看護者の言動について、自分自身を観察してみる「自己との対話」、「他者との対話」をする時間として、学習会を進めた。

■ 今後の課題

本学での「対話」の推進は、「自己との対話、人と人との対話という形で受容され実践されていった。」⁹⁾ という。対話 dialogue 関係とは「われ」と「なんじ」の関係で、われ=教師となんじ=学生の関係、又はわれ=学生となんじ=教師の関係である。主観・客観の未分離の関係では、他者との合一を求め合う世界が教育の場であり、他との比較に基づく相違・対立を求める場ではない。……他との平和的共存の世界を求めるものでなければならない¹⁰⁾。まさに、看護教育では、自己との対話、他者との対話、教師との対話、患者・家族・臨床スタッフとの対話を通して、理論と実践の融合をめざしていかなければならない。このことは、「自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する」¹¹⁾ というよう

な主観と客観が未分離の関性に近い患者と看護者の共有体験の中から、平和的共存の治療環境を造ることになるのではなかろうか。生きた実践科学としての看護学を、一人一人が構築していく努力の過程に「対話」を中心にした少人数教育を進めていくとき、今回研修した「IBL教育」の教育哲学と方法論を取り入れ、教職員相互の研修を深めながら、本学の教育理念を推進していきたい。

看護学生が、様々な経験をどのように意味づけしていくかが、その人の看護者としての成長に非常に大きく関わる。臨地実習教育では、学生の個別の体験をカンファレンスなどで実習グループ間で共有し、その経験を深く考えて意味づけすることが大切である。安酸¹²⁾は「教育の任務が経験の意味の進化と拡充にあるとするならば、これを可能にする方法がデューイの提唱する反省的思考(reflective thinking)と呼ばれる「探求」ではないか」と述べている。臨床の場で様々な経験を重ねていく学生は、自らの体験するその人独自の経験に、「対話」を通して有意義な意味付けをしながら、再現されない看護現象に対して「反省的思考」を繰り返しつつ探求し、実践的課題を問題解決していく土台作りが必要であろう。その場合に、本学の理念である「対話」が教職員と学生、あるいは臨床関係者と学生、臨床関係者と教職員の関係での「対話」、そして根本的には教職員相互の「対話」を基に相互理解と連携を図りながら、教材の精選をし、IBL教育を取り入れていけたらいいのではないかと思う。

■ おわりに

様々な教育形態のなかで、学習者自らが問題意識をもって、その解決を主体的に進めていけるような少人数グループでの臨地実習教育が、看護学教育に最も重視されている。個々の患者に応じて展開される看護実践に関わる理論や真理を探究し、より良き方法を見いだし、個人に応じて実践していく専門職業人としての育成が、学部教育の根底をなすものであろう。次年度以降カリキュラム上の問題を考えながら、IBL研修での学びを活かして、どのような少人数教育を、チューター学習会などを通して行っていくか、今年度の反省を含め、学生との対話や交流を大切にしながら、検討していく必要があると思う。

文 献

- 1) 坂田正二：広島文化学園建学の精神，平成11年度呉大学学生生活の手引き，10，1999.
- 2) 上掲書
- 3) 神津忠彦：問題基盤型チュートリアル学習－その概念と看護学教育における位置づけ，Quality Nursing, 5 (10), p.77, 1999.
- 4) 川野雅資：IBL とは－ハワイ大学での実践から，Quality Nursing, 5 (10), p.5, 1999.
- 5) 辻川真弓：[IBL の実際] 基礎看護学 Quality Nursing, 5 (10), p.5, 1999.
- 6) 川野雅資：三重県立看護大学での IBL の導入，Quality Nursing, 5 (10), pp.8-11, 1999.
- 7) 辻川真弓：[IBL の実際] 基礎看護学 Quality Nursing, 5 (10), pp.22-23, 1999.
- 8) ハンス・トリュープ著 宮本忠雄・石福恒雄訳：出会いによる精神療法，金剛出版 1982.
- 9) 広島文化女子短期大学創立30周年記念誌，pp.20-21, 1994.
- 10) 上掲書 pp.22-23, 1994.
- 11) ナイチンゲール：看護覚え書き 湯楨ます・薄井坦子・小玉香津子他訳，p.217，現代社，1985.
- 12) 安酸史子：学生とともにつくる臨地実習教育－経験型実習教育の考え方と実際－看護教育 41 (10), pp.814-823, 2000.